

らっと流されてしまいました。読めた本人は満足そうでした。

今回の授業では、特に3年連続で参加しているKUPI学生さんの大きな変化がありました。たろうさんは、1年目、なかなか書けず、メンターさんがつきつきりで相談に乗ってくれて、題とイラストで表現してくれました。2年目は自分から2つの作文(イラスト付き)を書きました。3年目、私が「KUPIの思い出を書きましょう。それ以外の題がいい人は、自分の好きな題で書いてください」と言うと、じっと考え、急に立ち上がった外に出て空を見つめ……。なかなか書き出しません。部屋に戻ってきて、メンターさんと話をし、メンターさんから「この3年間に使ってきた教室をまわりたいそうです」と相談がありました。授業の時間は気になりつつ、でも、それはすごい！と思いい、「いいですよー」。ちょっと心配になるくらい時間に戻ってきて、一気に書き上げました。

ゆきなさんは、最初の年、作文を書いたけれど、みんなには読まれたくないと言っていました。でも、2年目には、みんながどんどん読んで盛り上がりつつあるのを見ていて、メンターさんにも後押し

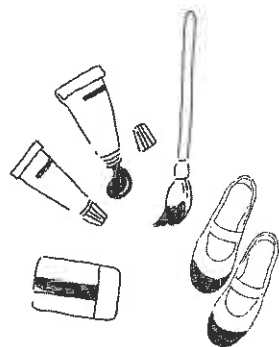
され、みんなの前で読み、3年目の今年からは、最初から「ぜひ読んでほしい」の印をつけていて、読みあいました。授業が終わって私がいなくなった後、「これからも書きたい」ということになったそう。で、メンターさんたちとも相談して作文を書くサークルをつくったのです。LINEで私に「顧問になってください」という依頼があって、二つ返事で引き受けました！サークル名もいろいろ出ましたが、「神戸大学つづり方サークル(通称 書きサー)」に決定。ゆるやかに活動を続けています。

このKUPIプログラム、新型コロナウイルスの前にはみんなでお出かけしたりもして、単に大学の授業を受けるだけではなく、青年期らしい生活を謳歌する場になっています。コロナが広がってからはお出かけはむずかしいのですが、休み時間も大いに盛り上がりつつあります。

学びの場に挑戦・冒険を

KUPIは5ヵ月だけですが、神戸には、高等部卒業後に2年間継続して学ぶことができる福祉事業型「専攻科」エコーL K O B Eががあります。知的な障害が

ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学
川地亜弥子

かわじ あやこ / 研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？—発達保障からみた障害児者のライフステージ』(クリエイツかもがわ)など。

第11回 青年期を謳歌する

もっと学びたい

神戸大学では、学ぶ楽しみ発見プログラム(通称 KUPI)という、障害がある青年(高校か特別支援学校高等部を卒業した人)に向けた学びのプログラムがあります。10月〜2月(「後期」といって、大学の半年分の授業と同じ期間です)、週に3回、仕事が終わるくらいの時間から集まって学びます。

今年度で始まって3年目。毎年参加者を募集するのですが、3年連続で来ているKUPI学生さんといえば、3年連続参加のメンターさん(授業のサポートをしてくれる大学生)もいて、なかなか人気のあるプログラムです。

私もそこで年に2回授業をさせてもらっています。私の授業では作文教育の歴史や理論を話した後、KUPIの学生さんたちに作文を書いてもらい、みんなで見たいです。文字の読み書きの得意不得意はあり、ほんの一言の人もあります。全員が書けます。自分の好きなこと、家族のことなど、時には好きな人のことも。今年度は愛の告白の作文もありました！読みあいの時に相手の人からさ

ある人は、高校や高等部を卒業した後、「就職」か「福祉的就労」しかないという現実に強い問題意識をもち、他の青年なら当たり前に選ぶことができる「学びの場」へ、という「第3の選択肢」を求めて、WAPコーポレーション(障害者の社会的自立を応援するために設立された会社)の社長、岡本正さんによって開設された、青年期の学びの場です。

エコーLは、「学生」「先生」などの呼称を使い、ゆるやかな学年別プログラムを採用しています。ここでは、開設から3年間の、学園づくりのワクワクとドキドキに満ちあふれた期間に注目します。社長の岡本正さんをはじめ、学園長(当時)の河南勝さん(元養護学校教諭)、元気な先生たちが、学生の学びをしっかり支えています。

学びの場、と言っても文字の読み書きや技能の訓練だけをするのではなく、青年期ならではの学びを保障することを重視しています。そのための実践の柱が、
①ゆたかな体験、②主体的に学ぶ、③仲間とともに、の3つです。

エコーLは開設当初から、放送作家の砂川一茂さんと挑戦する新喜劇、キャンブでのツリーイング(ロープを使った木